朝日新聞社会部編

ある生活

続"日本人の暮らし"

朝日新聞社会部編

ある生活

続日本人の暮らし

修道社

―― ある生活 ――

続・日本人の暮らし

昭和三十二年三月二十五日　初版印刷
昭和三十二年三月三十日　初版発行

定価　一三〇円

著者　朝日新聞社会部編

発行者　東京都中央区日本橋小舟町二ノ四
秋山修道

印刷者　東京都北区神谷町一ノ六一
原田憲次郎

発行所　東京都中央区日本橋小舟町二ノ四
株式会社　修道社
電話茅場町(66)一二四・四八八
振替口座(東京)六一六九一

落丁・乱丁はお取替えいたします

目次

月に半分が寮泊り……ガイド・ガール　中川寿美さん…一
願いは〝ゆっくり休みたい〟

一日、三百人欲しい客……コーヒー店主　黒川光啓さん…八
コーヒー自分は好きでない

サラリーより内容……女子大生　堀江瑠璃子さん…一五
将来の見通し立ってから

自分の血を患者に……医師　西垣朝圭氏…二三
貧困の下町に溶けとむ

〝お品〟をかぞえ十四年……お札の検査係　蓮美嘉子さん…三〇
単調さにも打ちかって

手掛けた殺人四十件……警視庁部長刑事　堀隆次さん…三六
日曜、正月もなく犯人捜し

〝ホコリだらけの男〟……サンドイッチマン　安部久氏…四三
人の流れに漂う楽しさ

〝ご帰館〟いつも不定……新聞記者　高木四郎氏…五〇
事件で一月も帰らぬことも
〝大隅大夫の商法〟で……はきもの店主　山下喜代丸さん…五六
恐妻家の名声も高い
夫を亡くした辛さ……学校用務員　大隅あささん…六三
どうやら家族五人養う
マメで働ければ……区役所運転手　加藤八郎さん…七〇
抜けぬ御奉公気質
ノミ一筋に打込む……菓子木型職人　渡辺三次郎さん…七七
職人気質で押通す
判事を動かした闘志……婦人弁護士　中川みどりさん…八四
〝女のくせに〟とはいわせない
夜学で苦闘の半生……定時制高校教諭　二村輝雄さん…九一
身につまされる教え子の姿
ひたすら働き続ける……選炭婦　佐藤けささん…九八
子供の成長を楽しみに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

夫の前進、妻も追う……社会党本部書記　野中　卓氏…一〇五
情熱をかける〝階級政党〟

売れた絵はたった四枚……画　家　赤穴桂子さん…一二三
絵筆を握って八年になるが

すり減らされる神経……テレビ演出者　後藤　武彦氏…一一九
下宿も寝に帰るだけ

子らの〝幸せ〟願って……人形づくり　市橋とし子さん…一二六
一つ一つに生命打込む

ガマンと親切がコツ……東京電力集金人　長村幸市さん…一三三
集金商売八年間無休の精勤

〝まだ天職と思えない〟……保　母　柏村富子さん…一四一
〝空しい気持〟との戦い

グチは言わないが……元　地　主　中島茂男さん…一四九
にわか百姓〝木から落ちたサル〟

喜ぶ患者に生きがい……マッサージ師　秋元得子さん…一五六
見えぬ眼を泣いたが…

ライオンとも〝懇意〟……動物園飼育課員　本間勝男さん…一六三
危険もあるが楽しさも

菊の新種を五十余種……寒菊作り　広田かつさん…一七二
家のため青春も葬り

商売がシンから好き……雑貨商　越沼三郎さん…一七八
〝貸し〟を作らぬ堅実さ

年中無休〝なんでも屋〟……旅館の番頭　山本憲三さん…一八五
願いは「旅館人」の地位向上

孤独もまた楽しい……広告放送員　恩田喜美子さん…一九五
一日を一坪の小屋の中で

ポスター一枚三千円……商業デザイナー　北岡真砂子さん…二〇〇
だが学閥のない気易さ

望みは〝本当の独立〟……理髪店主　山岸博君…二〇六
共かせぎで開店したが

老け役ばかり三十年……女優　堀切つねさん…二二
〝そこに舞台があるから……〟

あとがき……筆者のひとり　入江徳郎…三九

装幀　松田正久

月に半分が寮泊り

願いは〝ゆっくり休みたい〟

ガイド・ガール　中川寿美さん

昨今の観光ブームは大変なものらしい。東京都内を走る観光バスだけでも一千台は突破、つまり一つの地方都市の全人口がゾロゾロ都内を流れている勘定。しかも、このところ秋の観光シーズンとあって、バス会社は申しこみ殺到、どこもホクホクだ。このブームの第一線で働いているのがガイド・ガール（案内嬢）だ。口から先に生れた女の子にはふさわしい職業だ、などという陰口はさておき、種々雑多な人間相手の仕事だけに、彼女たちの苦労はひと通りではないようだ。女性の職場としてはなかなかの重労働でもある。そんなバス会社が東京だけでも大小合せて四十一社、六百五十台がブーブーしのぎを削っているのだが、そのなかの一つ、東京都千代田区神田花岡町一、大東京観光自動車会社の古参ガイド中川寿美さん(22)〝江東区深川塩崎町一〟の生活に登場してもらった。

「あア、くたびれた」「久しぶりねエ」夜八時すぎ、一日の仕事を終った彼女たちのあいさつだ。同じ職場でありながら、互いに顔を合せることも珍しい。たまに会えば、疲れ切った体を畳にペッタリと投げ出すだけ。なにげなく、彼女たちの口を出る言葉だが、ガイド・ガールの生態を象徴する意味もある。

そんな彼女たちのなかで、中川寿美さんは、もう古株だ。二十九年三月、大東京観光自動車会社が創立のとき入社。それから二年半、関東一帯の名所、古跡、観光地ならたいていしゃべり回ったそうである。

彼女がガイド・ガールを志した動機は「あこがれたのよ」とはっきりしている。もともと「お話し」は好きだった。近所の子供たちを集めて、おもしろい話をしてはいつも喜ばれていた。その好きな道でお勤めできる職業として、自分にはうってつけの仕事だ、と思ったという。

しかも、新しい時代の職業としての魅力だけではなく「あの制服がとてもスマートにみえるし……」と、正直のところ、こんな娘心も強く動いたそうである。なるほど、その制服たるもの、アメリカ空軍の制服と同じ、明るいブルー色である。もちろん、寸法をとっての注文服で、ピッタリと着こなした姿は八等身に近く見える。

ほんとうはネ……彼女は恥かしそうに声をひそめた。「詩人になりたかったのよ」詩をつくるのが楽しみで、思うままをつづってみたい、とも考えた。眼前にひろがる美しい風景、はじめてみる人情、風俗など、詩の材料は行く先々にいっぱいあったが「書くの、むずかしいわね」というわけで、まだモノになったものはないよし。

ただ、素敵！　素晴らしい！　と、夏の入道雲のように、むくむくとわきのぼる感興を大切に味わいながら、「詩をつくる気分にひたっている」そうである。彼女にとってはどこに行っても、詩の山がそびえ、詩の川が流れ、詩の森がこんもり茂って、まるで詩の世界で暮しているみたい――だが、現実はそんなに甘くはなかった。

サテ、彼女は朝五時に起きる。大体、バスでひとめぐりしようという観光客のスケジュール

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

は、つまっている。短い時間でたくさん見ようというのがバス利用の目的。そこで朝が早いとくる。

日課は、まず、お化粧から始まる。何といっても客を相手の商売である。年ごろの娘というだけではなく、化粧は絶対に欠かせない。

顔のつぎが車のお化粧。バスの窓ガラスをピカピカにふかねばならない。前の晩にアルバイトのおばさんが掃除はしてくれるが、一夜で、バイ煙のため汚れてしまうのだ。すぐそばにある国鉄田端機関区の機関車が吐き出す煙がうらめしいが、どうにも仕方がない。水を使うので、これから冬にかけてつらいそうである。

朝食、軽くいっぱいかしら？　彼女の顔をながめていると、そんな感じだが、実際は、それっぽちではないらしい。

客の待つ旅館に迎えに行って「お早ようございます」と微笑外交――このとき、客の質を見抜くことが大切。楽しい旅となるか、不愉快な道中となるか、おおむね決ってしまうとのこと。

「うまくやれよ、とか、前のはよかったぞ、なんていうお客さまがあるけど、そんなこという人、一番いやあね」

ひやかしたり、知ったかぶりする憎くたらしい客には、退屈しのぎにやる車内のクイズ遊び

のとき「うんといじめてやるのよ」とある。しかし、都会の客はうるさい、地方の客はおとなしい、といった具合に、年齢、職業といったもので客の品定めはとても出来るもんじゃない、という。こういう風に、特定の客層を指して悪口などいわぬところ、彼女もなかなか商売上手というべきか？

しかし、今日の客種はどんな人柄か、といち早く見抜くだけのコツは心得ているよし、このコツを覚えなくては、一日中バスのなかで一緒に暮すのだから、客との応接だけで神経がすり減ってしまうという。

そして「右に見えまするは……」とやる例の説明も、その日の客次第で適当にあんばいしていく。会社から渡される台本はあるが、そのまましゃべったのでは、どうしても固い朗読一本調子になるので、自分の好きな言葉をいれたり、笑わせたり、しんみりさせたり、いろいろ工夫を加えてみるという。

自分の好きな場所だと、持ち前の詩情が一層役に立つ。殊に、東海道五十三次のうち保土ヶ谷から戸塚に抜けた街道筋に昔のままの面影をとどめる松並木の風景が好き。そして、足の弱い人は保土ヶ谷泊りだが、強い人は峠に向ってテクテク急ぐ。峠には夕陽が赤く輝いている。宿場の客引きが走り出て、急ぎ足の旅人のそでを引く。その説明に——

「あの山この山、日が暮れて、峠にアさびしい風が鳴る。もしもしそこ行く旅の方、峠は暮

れます、泊りァんせ」と昔の旅情をしのびながら一席やると、客もしんみり聞いてくれる。この説明、実は歌の文句だから、節をつけて歌うのがほんとなのだが、「私はオンチだから歌はダメなの。そのかわり、うんと情をこめて〝語る〟のよ。ここんとこ、ほかんとこより好きだから、一生懸命よ」というわけ。

彼女は声がすぐかれる。大事な商売道具だから、砂糖湯で何度もうがいをする。そしてマイクに口を寄せて、ささやくような話し方にも苦心した。

客を宿に送って車庫に帰る。十、十一月の観光シーズンだと、早くて夜の七時か八時。十時、十一時になることも珍しくない。ぐったり疲れてしまって、都電でトコトコ家に帰る元気もない。それに、また朝が早いし……そのまま会社の寮に泊ってしまう。一カ月のうち半分以上は泊り。一日おきに帰宅できる人はいい方だという。

それで、月収は？「税金がスゴク高いんですもの」と、まず彼女はボヤく。税務署というとこは、こんな娘さんにまで恨まれているらしい。約一万五千円、このうちから税金がひかれる。

「貯金なんて、ゼンゼン」だそうで、「みんな食べちゃう」そうである。勤務時間が長いこと、そしてバスが揺れるので、お腹がすぐにすく。だから朝、昼、晩のほかに、案内の暇をみては、まんじゅうやそばを食べる。時間がないので、大急ぎでつめこむ。そして揺られて、また、つめこむ。おかげで胃が悪くなった。痛くなる。ちかごろは胃薬がどこにでもお伴する。

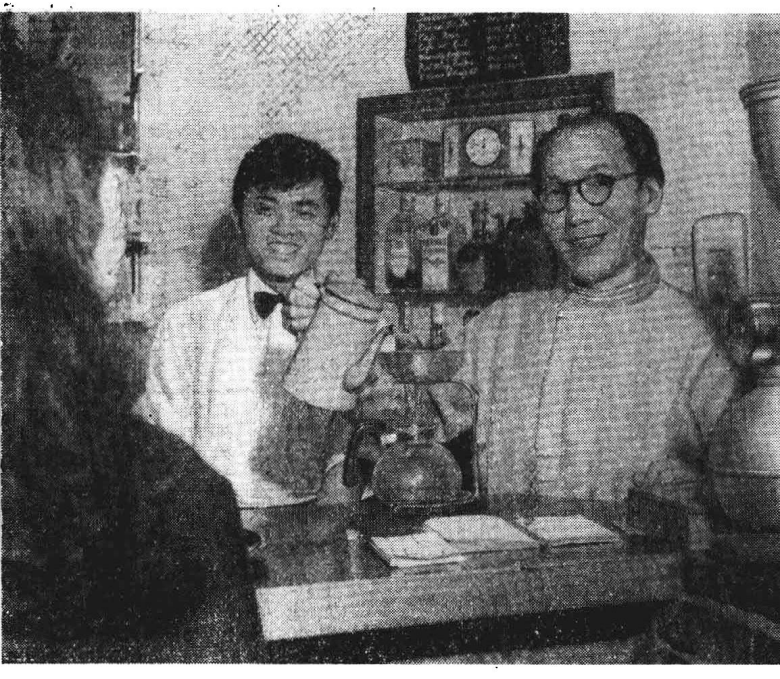
といった具合で、私生活なんてまるでない。彼女は七人姉弟の長女。両親は健在、父はハイヤーの運転手。次の妹も観光バスのガイド、三番目が中学二年、末っ子はまだ五つ。男の子は一人だけで小学五年生。そう豊かでもないが、家庭に波乱がないのが、まずはめでたいとのこと。

ただし、たまの帰宅でも、ゆっくり休養できないのが玉にキズ、と彼女は嘆く。昼まで寝て、あとはせんたく。そして夕食の卓にも、父と次女の姿はみえない。一家九人、全部の顔がそろうことなど滅多にない。

映画をみたり、本を読んだりする時間などない。ましてや、恋だの愛だの、そんな手間ヒマかかることが出来るはずがない、ともいう。「どっかで、ゆっくり休みたい」のが、さし当っての大悲願である。いま、せめてもの慰めは、ゆっくりおすしでもぱくつくことだそうである。

最後に、「いい結婚がしたい」――これが胸に秘めた念願。人柄第一で、顔や姿に注文はないという。新婚旅行は浅間高原へ、ガイドで行ったことのある美しいあの高原を、もう一度、二人だけで静かに歩いてみたい、彼女の幸福はそこから踏み出せるような気がするそうである。

結婚準備は生け花やお茶ではなく、料理、裁縫、育児などみっちり勉強したいという現実主義。それなのに年齢を聞けば「もう、おばあちゃんですわ」と身をくねらせて笑いくずれる。そして、かすかに「二」と答えた。もちろん、二十二歳のことである。



一日、三百人欲しい客

コーヒー自分は好きでない

コーヒー店主　黒川光啓さん

日本人で初めてコーヒーを飲んだのは唐人お吉だという説がある。真偽はさておき、いまでは都会人ならだれでもコーヒーを飲む。「ちょっとお茶でも」といえば、まずコーヒーのこと。値段も戦前の一杯五銭時代から、いまは五十円から百円にと、千倍二千倍にハネ上ったが、味も世界の最高水準をゆくゼイタクさだという。おかげで全国消費量の半分以上を飲む東京には、千軒を越える店が繁盛し、例えば国電荻窪駅付近だけでも戦前のゼロから、この数年間に約二十軒が目白押し。コーヒー店は決してつぶれない、というジンクスさえ生れる好況ぶりだ。これは、中央線沿線でのシニセの一つ「アカイヤネ」主人黒川光啓さん(60)＝東京都杉並区天沼一ノ一五〇＝の生活と意見である。

「私はですネ。八幡神社のお札を持ってこられればお金を出しますよ。氏神さまだし、ご近所だしするから、ありがたくいただきます。しかしですヨ。明治神宮だ、ヤレ伊勢神宮だといってきたって、絶対にお札は買いませんよ。私が神さまだ、といってやるんです。私の家の神さまは、私一人でたくさんです。神さまは幾つもいりませんッ、とお断わりします。ね、そうでしょう?」

これもリクツか。〝神さま〟を奉って、コーヒーおじさん一家は無事安泰……聞き手は、うむ、とうなずくより仕方がない。

「参拝のときには、心からお参りします。だけど、オサイセンはあげません。もったいない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor